

幼稚園教員養成課程における新設教科「生活」 の扱いについて (1)

渡 邊 義 生*

Teaching Management of the New Subject 'Life Environmental Study' for Kindergarten Teacher Training Program at Colleges (1)

Yoshio WATANABE

1. はじめに

教育職員免許法の改正により、幼稚園教員養成課程における教科に関する専門教育科目として音楽、図画工作、体育にくわえて国語、算数又は生活が課せられた。この「生活」は小学校学習指導要領の改訂にもなっており、小学校低学年に新設された教科であり、これにともなって従来の低学年の理科、社会が廃止された。この新設教科「生活」は、平成4年度から小学校で実施されはじめたもので、具体的な教育内容、方法について、まだ十分に実践やその評価がなされていない段階である。

このような状態にある「生活」を幼稚園教員養成の教育課程に組み込む場合、小学校の教科である「生活」を必要とする意義や、幼稚園教員養成の場合の指導内容、方法など所謂シラバス（授業計画）の検討がせまられている。この問題は、日本私立短期大学協会保育科研究委員会できりあげられ、平成3年度の日短協保育科関係教職員研修会でも討議され、筆者も試案を発表した。

その後、各養成大学においてとりくまれているがその内容、方法はさまざまである。これらのことをふまえて3年間の実践をとうして得た知見をもとに「生活」の扱い方について考察を加えてみる。

2. 生活科の新設から学ぶ事項

制度の変革にあたってそれを理解するためには、形

を理解するだけでは不十分である。変革にいたった原因と経緯、展望を知ることによって形のもつ意味を理解することが出来る。したがって、「生活」の授業計画にあたっては次の二つの事項と学生とのかかわりで考える必要がある。

(1) 生活科の新設の経緯と期待されるもの

約20年の検討の結果、わが国の教育体系の改革という流れの中で踏み切られたものである。教育制度の変遷と社会の状況、人の生活の視点で考えることが大切である。

(2) 生活科の特色

教科目標としては「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上に必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」とある。

この教科目標に示されているように生活科の特色は、低学年児童の発達段階に相応しい授業（直接体験を通して、活気あるとりくみ）を身近な環境と生活の中で展開し、主客未分化な段階からしだいに自分とのかかわりで身近な社会や自然を意識化し、学習や生活していく基礎的な能力や態度を育て、自立への基礎を養うことである。したがって、教師の指導力としては、直接体験による活気ある活動という授業形態、幼稚園教育との連続性、自分や身近な環境を意識化することについて理解を深めることがもとめられる。

* 幼児教育学科

3. 学生の実態

ここ10年間の本学幼児教育学科の学生の気質・行動・関心の対象などが著しく変化してきていることは、同世代の若者に見られる一般的現象としてとらえることができる。

顕著な例をあげてみると、知識は豊富にもっているがそれを身のまわりの事象に対応して思考することが苦手である。ビデオ・オーディオなど最新の電子機器の扱いには習熟しているが、操作に訓練を必要とする機器の扱いは避ける。プレゼントの花を生活にとりいれることには関心があるが自然の草花は意識のそとにある。リズム・体表現などの感覚的表現は生活の中にとけこんでいるが、自分の考えを他者に言葉で説明することには抵抗を感じる。マニュアルにしたがったり模倣は簡単に行なうが実物から学んだり工夫することに慣れていない。分かっていることでも指示されればやるが自発的にはやらない。

これらの最近の学生にみられる気質や態度は、現代の社会や家庭の生活、学校教育の影響からもたらされたものであって一面的に批判されるものではない。むしろ、現実の社会生活への適応のあらわれとみることができる。

しかし、生活科の指導という観点からみると上にあげた能力・態度はかなり問題をもっているといわざるをえない。これらのことから、生活科が免許法上、幼稚園教員養成の教育課程に位置付けられた意味を理解することができる。したがって、生活科の授業計画の中にはこれらの学生の特性を考慮して検討する必要がある。

4. 幼稚園教員養成課程における生活科の基本的視点

幼稚園教員養成課程の生活科の扱いを考える場合、生活科の特色と学生の実態をもとに次のような視点から授業の内容を構成するよう試みた。

- (1) 生活科にもとめられる教育理念
現在の教育にかかわる社会的病理現象への対応と未来社会への対応
- (2) 生活科の新設は、幼稚園と小学校教育の関連を重視し子どもを中心にすえた教育
- (3) 学習指導法の類型とその特徴
- (4) 直接体験重視の活動と子どもの成長発達のとらえかた

- (5) 自ら生活者として、身近な事象とのかかわりを考える能力・態度

これらの視点をもとに授業計画を構成し、すすめるうえで次のような配慮をするようつとめる。

- (1) 学生が経験してきた学校教育と関連づけながら扱う。
- (2) 現在、社会的に問題・話題になっている事象と関連させて扱う。
- (3) 社会の歴史的变化と結びつけて扱う。
- (4) 演習・実技をとり入れ、学生自身が体験の意味に気付くように扱う。

5. 生活科の講義内容

平成4年度の内容（1年生、後期、2単位）

目的、内容、項目

- ・ このたび新設された小学校教科「生活」の特徴と、それを促したわが国の社会的背景について考えるとともに、子どもを中心にすえた教育のありかたの認識を深める。
- ・ 「生活」にみられる、子どもの生活中心の指導法と幼児教育との関連を考える。
- ・ 学習指導法の類型と特徴を知り、子どもの行動から子どもの内面をよみとる力を養う。
- ・ 人の生活と環境との関わりを実際的に扱い、生態学的視点から人の生活のあり方、自然のとらえ方を扱う。

(内容・項目)

- (1) 小学校教科「生活」について
 - ・ 生活科の特徴
 - ・ 生活科新設に象徴される学校教育の変化と教育改革とのかかわり
- (2) 活動や体験を重視した総合的学習（合科的学習）指導法について
 - ・ 学習指導法の類型と特徴
 - ・ 生活科の指導の実際
- (3) 活動を生かす指導の要点
 - ・ 季節の変化を体感させる指導の要点
 - ・ 物をつくって遊ぶ活動を発展させる指導の要点
 - ・ 飼育・栽培活動、継続観察の指導の要点
 - ・ 自分や身のまわりの事象を意識化させる指導の要点
 - ・ 絵や実物などで活動したことを表現させる指導の要点

(4) 季節と活動

- ・ ヒヤシンス、チューリップの栽培
- ・ 冬の自然の特徴のつかみ方

(5) 人の生活と自然とのかかわり

教科書

「小学校指導書 生活編」(文部省)

指定図書

「小学校教育課程 生活」(第一法規)

「むしの子どもになりたい」堀畑章子
(清水弘文堂)

6. 講座内容の実際

(1) 教育制度の変遷

学生にとって教育制度の問題は、生活の実感として捉えにくいものであり、生活科の新設の意味は具体的にも感覚的にも理解しがたいものと思われる。その意味から、大まかなわが国の教育制度の変遷を考え、社会の変化と制度の改革を歴史的にとらえて理解を図ることが学習の動機づけとして効果がある。したがって、次のようなキーワードを示して考えることを試みている。

明治以前の教育

- 国による国民を対象とした制度なし
- 大陸文化の吸収
- 家庭、地域社会による教育
 - 寺子屋、私塾、藩校
- 生産技術、読み・書き・算盤の生活に直結したものの学習
- 独自の文化の形成

明治5年近代教育制度の確立（第1次教育改革）

- 西欧文化の吸収
- 近代化を指向
- 殖産興業 富国強兵
- 義務教育制度

昭和22年6・3・3制度（第2次教育改革）

- 欧米文化の吸収
- 民主化の推進 平和国家
- 科学技術の振興 工業立国
- 義務教育の延長 高等教育の拡大

平成2年教育制度の拡充・弾力化

(第3次教育改革?)

21世紀を指向した教育

- 国際化（グローバルな視点）
- 情報化社会 個性重視

生涯学習体系の整備

家庭、社会の変化への対応

教育問題を扱う際、次のような資料をもとにすすめた。

資料

「子供たちは一体、心から喜びを味わうことがあるのだろうか。小学校で二、三年生を受け持ったことのあるAさんは、二年間の教師時代を振り返って、今でもこう思う。例えば算数の掛算・割算。問題が一つ解けても「やった、できた」と喜んでいる暇はない。はい、次一と、今の子供たちはいつも追い立てられている。できて当たり前一親の要求度も高い。けなげな子供たちは、自分が喜ぶよりも、まず親の期待にこたえようとする。……中略……教職をさったAさんは今、福祉の勉強に取り組んでいる。「そんなに背伸びしないでいいよ。そこから頑張ってください」とやさしく呼び掛ける福祉の考え方の方が、自分には向いていると思う。ただ、福祉を学んだあともう一度教師になる道をAさんはまだ捨てていない。」中国新聞 天風録 平成2・12・12より

この一文をもとに学校・教育・子ども・教師のかかわりを考える。事例にもとづいて意見を書いてまとめ、その上で話し合うと理解を深めることができる。

(2) 生活科と幼稚園教育の関連

幼稚園教育要領は、平成元年3月に25年ぶりに改訂された。そして幼稚園教育の基本は「環境による教育」とおさえられ、幼児が遊びを通して主体的に環境にかかわることによって人間として生きる基礎となる力を身につけ、自己を形成するという理念が再確認された。そのため保育内容は6領域が教科的色彩にとられやすいということの反省から、幼児の発達の側面からのとらえ方として5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）に改められ、その指導は幼児の生活の場で行なわれる総合的活動の中で援助のかたちで行なわれることが強調されるようになった。

この幼稚園教育の考え方を小学校低学年に導入し、その接続・発展を図るものとして、生活科が新設された。即ち、1) 入学間もない児童が、幼稚園での生活の延長にあたる学習形態の生活時間をもち小学校教育への適応を図る。2) 低学年児童の発達特性を生かし、自発性に基づく楽しく活気に満ちた活動の中で、自分

や自分とのかかわりで身の回りの事象を考えるようになる。3) その活動の過程で、生活に必要な習慣や技能を身につけ、4) 学習者・生活者として自分から取り組む能力・態度を養う。5) この力を他の教科等の学習に生かしていく。

このように、生活科の新設は子どもの成長・発達と教育とのかかわりを重視し、子どもの側にたった学校教育制度の改革を目指していることの認識を養う。

(3) 具体的な活動や体験を通しての学習

具体的な活動や体験を通しての学習は、かねてから小学校教育において重視されていることである。このことは、児童の発達特性から当然なことであるが、最近の知識習得にかたよりがちな現実から生まれる教育上の問題にたいし、児童の学習や生活の基礎的な能力や態度の育成をめざすために、この学習方法を中心にした教科として生活科が新設された。

したがって、生活科の学習の評価が知識・理解でなく活動にとりくむ意欲や態度に求められていることは大きな特色である。また、生活科の理念は他の教科の学習にもいろいろな形で生かされるようもとめられている。これらのことを説明だけでなく次の資料の内容と比較する。

資 料 昭和16年 文部省 「自然の観察」設定の理由

「自然の観察」は、国民学校に於いて設けられたものである。勿論、小学校の教科目の理科と、国民学校の理数科理科とは同一のものではないが、尋常小学校の理科は第4学年から課することになっていて、低学年に於いては、その初歩段階の指導を欠いていたのである。然るに、国民学校の理数科理科に於いて、低学年からその初歩指導をすることに定められたのは、主として、次の理由からである。

(1) 児童は、就学以前から自然に興味をもっている。自然の中で自然と共に遊び、自然に驚異を感じ、自然から色々なことを学びながら、経験を積み、生命を發展させている。又、機械・器具の利用されている現代に生活している児童は、これらに接して経験を重ね、殊に舟や車や飛行機などに興味をもち、色々な玩具をもてあそび、これらから色々なことを学び、又、工夫する態度も養われて来ているのである。このような発達過程にある児童を学校に於いて指導するには、その過程に順応すべきはいうまでもないところであって、

これに対して何等の考慮を払わないときは、児童の自然物・製作物に対する興味の発達を中断することとなり、将来の発展の支障となるのである。即ち、低学年に於いて、このような指導をすることは、寧ろ当然のことといわなくてはならない。

(2) 理科指導の目的を達成するには、自然に親しみ、自然を愛好し、自然に驚異の眼をみはる心が養われなくてはならない。又、自然のありのままの姿を素直につかまなくてはならない。かような修練は、主客の未分化な時期における指導が極めて重要な意義をもつものである。知情意一体となって対象にはたらきかけるには、この時期の学習を疎かにしては、殆ど不可能といつてよい。生命愛育の念も、理知の働きが著しい時期よりも前に、その基礎が養われなくてはならない。生活を秩序正しくし、科学的に処理する態も、この時期を逸しては、身につけることが容易ではない。即ち、理数科理科の目的を最も有効に達成するためには、是非とも適切な指導をしなくてはならない時期である。

この50年前に設置された小学校低学年理科の設定理由と今日の生活科の新設との理由を比較することによって、共通するところ違っているところを指摘し考察する。(この扱いは、検討中である。)

(4) 具体的な活動や体験を通しての学習を理解するための演習

1. 「石ころあそび」

目 標

石ころを用いていろいろな遊びをする。遊びという活動の過程で学生自身が何に気付くか。そのことを通して子どもの行動の中にあるものを推測できるようにする。

方 法

1人あたり5～6個の小石を小石置場から拾ってくる。1人につき3～4人のグループで自由に遊び、いろいろな遊びを体験してみる。

学生にとっては、あまりにも幼稚な遊びのためか手がでない。ヒントとして並べて形をつくる、何かにみたてる、転がしてみるなど話す。

活動状況

1人遊びでは小石を比較したり、並べて形をつくったり、重ねたりしている。グループ遊びになるとお互いに話し合いながら、色や形で分けたり、模様や形から動物にみたてたり、石のせを競った

り、石を斜面を使って転ばすなど活発になる。

活動の中で気付いたことは、最初は友人のやることを見ながら始めているが、なにか感じると熱中していく。特に競争するような遊びにはのめりこんでいく。

学生が最も興奮したのは、石転がし遊びの過程で、転がった小石がコマのように回転することに気付きコマ遊びに発展したグループがあらわれたときである。全員がコマのように回転する小石を見つけようとした。遊びの仕上げはグループ代表による小石のコマ競争だった。

学生の感想から

遊びの種類	気付いたこと（学習）
1人遊び	
石くらべ	いろいろな色、形、模様
石に絵をかく	面白い形、模様
形づくり	人形、乗り物、枯山水庭園
石づみ	平たい石からのせる
グループ遊び	
石くらべ	色、形、大きさで分類できる 分類するとき連続的な違いがある
石づみ	ルールをきめて遊ぶ
石をうちあう	音に違いがある
石転がし	斜面を使って遊ぶと競走できる 平たい石は滑る 丸くて 小さめの石がよく転ぶ 球形 でなくてもどこかの面が丸く なっていればよい
コマ遊び	回転するうちに起き上がって 回る形がある

考 察

この遊びにおける学生の活動状況、気付いたことから次のようなことがまとめられる。

- 石の特徴など物の属性をあげることができる。
- 手触り、見る、聴く、重さなど五感によって確かめることができる。
- 実際に体験することで予想しないことに会う。
- 模倣するうちに工夫することができる。
- 現象（よく転ぶ）と原因（形・重さ）の関係を考えることができる。
- 1人より仲間と遊ぶほうが活動を深めることができる。
- 遊びにはルールが必要である。

- 適切な助言が活動を盛りあげる。

このように、簡単な遊びと思われた石ころ遊びの中に多くの教育（学習）作用が含まれていることがわかる。

むすび

具体的な活動や体験を通しての学習を子ども中心で行なう場合、教師の役割は子どもの行動の中にさまざまな要素が醸成されていることをよみとり、それに配慮して指導・援助することである。このことを具体的に実感させる1例である。

2. 「みのむし（ミノガの幼虫）の観察」

目 標

みのむしは、子どもの観察の対象として、養づくりのようすなどが興味をもって扱われている。ここでは、みのむしの歩く状況を観察し、動物の構造と機能と環境とのかかわりを体感させるとともに、身近な自然を観察することの意味を体得させる。

方 法

みのむしを採集し、ガラス水槽の内側の隅におく。しばらくするとみのむしがガラス面を登りはじめる。これを水槽の外側から観察する。登るようすをたしかめたら、ルーペでよじ登る方法を詳しく観察し、記録する。

結 果

みのむしが、滑りやすいガラス面をのぼるのに、口から吐き出した糸で梯子状の足場をつくり、脚をかけて登るようすが観察できる。口からだした糸をガラス面の一点にくっつけ頭を動かして横にはり、これを数回くりかえして、これに脚をかけて体をもちあげる。ついで頭をもちあげ左右に動かして糸をはり、それに脚をかけて体をもちあげる。この動きをくりかえして糞をつけたみのむしが垂直なガラス面を登っていくようすがよくわかる。

学生の反応

みのむしで何をするのか、ややさめた態度で準備をしていたが、みのむしが動き始めると声をあげながらようすをみていた。ルーペで観察を始めると真剣な表情で見入っていた。

やがて、質問を發しだした。

- 網状の垂直面の場合はどうだろうか。
- 自然の状態、樹木や葉の場合は。

•体の大きさによって、ガラス面につくる糸の梯子に違いがあるだろうか。

さまざまな疑問や推論が学生の間におこり、楽しさと期待をもって確かめようとした。

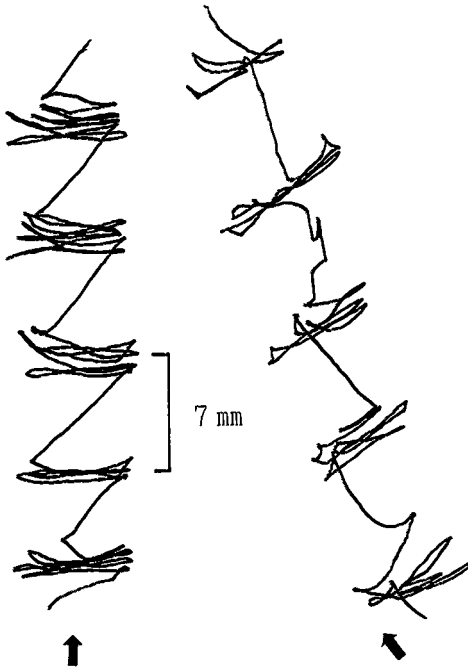


図1 みのみし糸の梯子

まとめ

網目や樹木などの場合は、鋭い脚の先をひっかけて登る。糸はだしてもはっきりした梯子はつukらない。ガラス面は特別な状況と考えられる。いろいろな状況のもとで巧みに、懸命に行動するようすは、生物が自分たち人間に共通する生きざまを示していることを考させるに適した体験を与えるものである。

[註] このみのみし糸の行動は、かって筆者が早朝大きな窓ガラスに1条の糸のすじを見つけ、調べた結果みのみしがはったあとであることを確かめ、感動した経験がある。あらかじめ、窓ガラスに糸の梯子がくっついているものを提示し、何だろうと考えさせたうえで上記の活動を始めるのがより効果的であろう。

3. 「自分の学内生活と学内施設とのかかわり」 目 標

自分とのかかわりで身近な環境をとらえる(意識化する)ことが、生活科の特徴の1つである。このことを体験を通して理解する。

方 法

1) 大学の校舎の白地図を与え、学内の施設名を記入させる。2) 次に自分が学内生活でよく利用している教室・練習室などの施設を、利用度に応じて自由にイラストで表現させる。イラストによる表現は最近の若者の得意な分野である。

活動状況

1) の白地図の場合、記入できない施設や場所の位置が確認できないことの多さに気づき、とまどっていた。2) の場合は、自分がよく利用している施設を中心に、次第に周辺へと楽しそうに表現していく。表現のしかたは、学生によってさまざまにお互いに比べあっている。

考 察

1) この作業のなかで、学生は良く知っているつもりで学内施設やその位置関係が、意外に曖昧な認識の状態であることに気付いた。

2) 客観的に表現するためには、実際に現場で調べて記入しなければならない。

3) 自分の生活とのかかわりの部分で表現することはたやすく、表現することによって、改めて自分の学内での生活を認識するとともに、施設をハードなものからソフトの面で捉えるようになる。このことは、イラストの中で室名よりもそこでの活動を示す表現が多いことでわかる。

まとめ

この演習では、最も身近な学内施設を対象として、身の回りのものを自分とのかかわりで意識化することをねらったが、校庭の樹木、道端の植物、畑の雑草などにおいても同じことがいえる。そして、意識化することによって、それを調べたり、知識を習得したりし、それにより意識化が一層ふかまり、しだいに客観的にとらえていくようになることを具体的に理解する方法として扱うことができる。

• その他の演習例と効果

ヒヤシンスの水栽培

2~3人で1個ずつ水栽培をする。

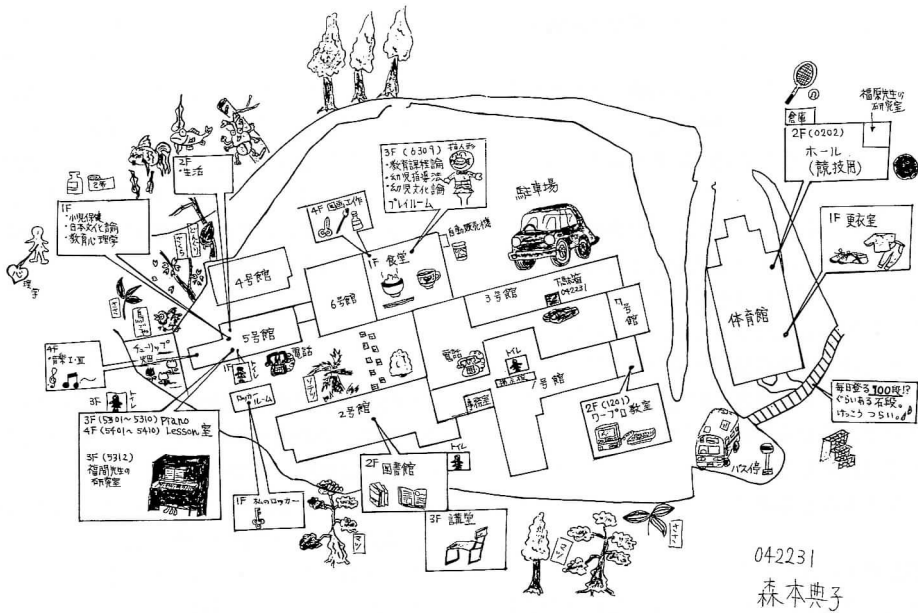


図2 学内生活と学内施設のイラスト

1) ヒヤシンスの発根や成長は、花の色の種類によって著しい差があること、同じ種類の間にも若干の差があることに気付き、多くの個体を扱うことによってはじめて確認できること。

2) 一緒に始めたのに差が表れた事実を、どのように子どもにとらえさせるか。自分のヒヤシンスの成長が遅いと、悩んだり興味を失うことがある。

3) 記録することによって、成長の状態に気付く(意

識化) こと。記録をとらない場合は、花が咲いたという結果の確認で終わってしまう。

4) 記録することが事象の変化を時間との関係でとらえるのに必要であることを理解する。

5) 学習の効果は、体験の過程にあることを知る。

以上のような演習により、学生は「具体的な活動や体験を通しての学習」のもつ意味を捉えることができる。即ち、子どもが活発にとりくむことのできる内容をどのような援助のもとに与えるか、その中で気付いたものを子ども自身が次の活動へ結びつけていけるか、体験の中にはさまざまな能力・態度を養う要素がふくまれていること、子どもは働きかけることによって働きかえされて成長することを理解し、これが教師の指導力の1つであることを認識する。

(5) 学習指導法の類型と特徴

学生にとって学校における学習とは、教科学習であるという印象がつよい。しかも、教科学習とは評価されやすい知識の習得が目標で、教えられ、覚え、ドリルすることと捉えている場合が多い。したがって、遊びが学習であるとか、具体的な活動や体験を通して学習するといっても理解しにくい。又、従来、学習指導要領の改訂のたびに強調される指導法に変化があり、とまどう現実があった。今回の生活科の新設も問題をふくんでいる。そのため指導法の類型を教授・伝達を主とする学習と子どもの自発性を主とする学習に大別し、これを対比して理解を図る。

教授伝達を主とする学習	自発性を尊重する学習
系統的学習	活動や体験を通して学習
教師主導型	子ども中心型
訓練的・計画的	発見的・自主的
画一的	個性的
マニュアルによる学習	問題解決型学習
知識・技術の習得	意欲・態度の育成
評価しやすい	評価しにくい
押しつけになりやすい	放任になりやすい
受け身的	能動的
指導しやすい	指導しにくい

この2つの学習指導法には、それぞれ特徴があり、学習の流れの中で、内容・教材・子どもの状態に応じてどちらを選択するか教師がきめなければならない。一方だけに偏ると問題がおきる。現在、学校教育で問題になっていることの1つがこれである。教授伝達式の学習が低年齢化しているために問題が生じ、幼稚園や小学校低学年に自主性を尊重する学習の必要性が強調されてきたことの意味を図る。

7. おわりに

幼稚園教員養成の立場から、小学校低学年の新設教科「生活」の授業計画にあたり、学生の実態をふまえて次のことについて扱いを検討した。

- 1) 教科「生活」が、小学校低学年の教育課程に新設された理念と背景の教授法
- 2) 教科「生活」と幼稚園教育とのかかわり
- 3) 教科「生活」の特徴である総合的学習の問題点と指導力の育成の教授法

参 考 文 献

- 1) 文部省 小学校指導書 生活編
- 2) 文部省 幼稚園教育指導書
- 3) 中野重人編著 小学校新教育課程の解説 生活第一法規
- 4) 板倉聖宣他 理科教育史資料1 とうほう
- 5) 文部省 目で見る教育のあゆみ
- 6) 中国新聞 天風録 平成2・12・12

Summary

This study focuses on the syllabus for teaching the new subject 'Life Environmental Study', which was newly added to the course work of the kindergarten teacher training program at colleges.

The writer specifically views the following points in the study:

1. Method of teaching for the educational aspects and background of the new subject 'Life Environmental Study' at lower-grade in elementary schools
2. The relation between the kindergarten education and the teaching of the new subject 'Life Environmental Study'
3. The problems of teaching a generalized subject like 'Life Environmental Study' and the teaching strategy for effective education on the subject